

講演タイトル： 『質の高い老後を考える』
講演日： 2003年6月27日（木曜日）
主催者： 井草地域集会施設運営協議会
講演者： 松尾 伊都子さん
会場： 井草地域区民センター

松尾伊都子様プロフィール

昭和34年より、杉並区下井草に住む。3人の子供は、杉並区立小・中学校で学ぶ。自宅において、「まつお文庫」を開設し、読み聞かせの活動をする。地域児童館が出来た後、自宅の文庫を閉鎖する。その後、井草地域区民センターが設立され、コーラス「おたまじゃくし」等のメンバーとして参加する。外国人講師（英語で歌う会）と、芸大生の指導による「中高年の為の発声の会」を作り、アシスタントを務める。カウンセリング関係においては40歳頃から勉強を始める。現在「プレイ・バック・シアター」のメンバーで心理劇を行う。複数の大学合唱団で、ロールプレイングによる次代養成を行っている。

松尾伊都子さんから、センターへ2通の手紙

（1通目）

ヨレヨレにならないで生きるには、人間の英知が根底にあると思います。私自身、他者との出会いの中で自分の許容が広がり、支えあう能力が伸びてきました。もし、この地域コミュニティーセンターの実現が無かったら、地域の人達との出会いはもっと幅の狭い、密度の薄いものでしかなかったと思います。年寄り元気時代の今、私の悩みは皆さんと共通していますし、私に出来ることは皆さんにも出来ることです。地域は新しいファミリーの型を作っていくのではないのでしょうか。血縁関係のファミリーにならって、あるいは隙間を補っていくのではないかと思います。

（2通目）

人生には終着駅があります。どのように生きていくかを選べる時代に私達は生きています。本当にやりたいことをやっているのだろうか、選択の多様性の中で迷っているのも事実でもあるし、80歳を生きる事になるだろうというのも現実です。

私の中には100歳まで生きた人が3人います。野上弥生子・榎本うめ子（キリスト教独立学園教師）・小手川みつ(母)。私はこの3人をお手本にしています。

3人の息子があり、主婦でもあった野上弥生子は作家です。既に、何人かによって語られていますが、彼女の人生は鮮明で、一番伝えやすいので選びまし

た。今日このセンターと一緒にいることも、一つの出会いだと思います。一緒に考えていきたいと思います。

司会者（西原さん）

今回の講演に向けてのお手紙を2通頂きましたので、ご紹介しました。これから「質の高い老後を生きる」という事でお話をさせていただきます。宜しくお願いします。

講演：『質の高い老後を考える』

私は現在73歳です。長年、この杉並区に住んでいます。今まで多くの人に出会いました。この中で、半数以上の方々と、旅行やワークショップと一緒にやったり、とても楽しく過ごしています。今でもこんなに元気でピチピチしているのも、こういう出会いのおかげです。

皆さん、今こういう言葉がはやっているのですって。『いない、いない、婆（ばあ）』。「ばあさんが、外へ出るので、家にいなくなる」との意味だそうです。ここに来ている方達は、とても幸せで元気いっぱいなのですが、来れない人達のこと、ちょっと頭の隅に置いて、一緒に考えていきたいと思えます。

人生には終着駅があります。それまでどのように生きていくのかも、決められます。年金など自分のお金で、自分がやりたいことをやれる。「質の高い老後を生きる」とはどういうことか、それを一つの目標にしています。でも、非常にあいまいです。具体的に一緒に考えていきましょう。こういうことをやりたい、一緒にやってみたいということがありましたら、後でどうぞ書いておいて下さい。

妻が夫を看取り、その後自分の生活も困難になった時、子供の中の誰かが面倒を見る。このシナリオはすっかり壊れてしまいました。老後の問題は個人差が大きく、マニュアルというものが全然役に立ちません。今までいくつかの老人ホームへ行き、ワークショップをやったり、ボランティアに行ったりしましたが、これが良い、これを選択したいという形は役に立たない気がしました。結局のところ、私を含めてですが、死ぬまで元気でいたいという、非常に抽象的なスローガンだけがあって、他のことは先送り、今日は大丈夫だ、今度はこうしようと先送りして、人生には終着駅があるのだけれども、これも自分の頭の中で先送りしているのです。いつかはこうなるのだけれどもそれに触らない、ハッキリさせない。だけど不安があるという状態です。おそらく、皆さんもそうではないでしょうか。

どこからを老後と考えるかも、それぞれ違います。私個人としては60歳からと考えています。私どもが家族の中でとってきた役割があります。夫婦、親、会社での上司と部下などの役割です。そういう役割から解放されて、改めて一人一人、自分の人格として付き合い、お互いに育てあう。そういうスタートができるのも60歳からだという気がします。

また、個人的なことですが、『さあ、これから私達の時代よ』と野上弥生子が叫んだ時、私が18歳で彼女が60歳でした。これが鮮明に私の中にあっただので、老後というのは60歳からだと思ってきました。日本の家族制度が崩壊したのではなく、日本の家族制度が解体した。そこに、新しい、血縁関係ではない人間関係が出てきたということです。日本の歴史のなかで、村というものによって、もう少し新しい、一人一人が自立したところで付き合える人間関係。昨日まで知らなかった人が、こういう区民センターなどで出会って、その人のバックグラウンドとかも全然関係なく、その人達と人間関係を作っていく。地域センターという場所は大変な働きをしています。センターが無かったら、こういう出会いは無かったらと思うと思います。

自分の今までの人脈の中だけで考えると、パターン化してしまいます。都合が悪いと、自分ではなくあっちが悪いと言う。それでは自分の人間の許容範囲が広がっていきません。それで自分でストレスを作っていく。ストレスにはマイナス、プラスのストレス両方があります。ストレスが無いのは痴呆になった時です。両方のストレスがバランス良くある状態がいい。プラス・ストレスは嬉しいからドンドン引き受けますが、マイナス・ストレスも拒絶するのではなく、そばに置き自分との関係を保つ。そうすると、許容範囲が広がって、私達が見たことも会ったこともない「死」に直面した時にも、自分なりに受け入れができます。私自身もそう思っています。

「老いる」ということはどういうことかと考えると、若い時に出来たことが心身ともに段々不都合になってくる。これが老いることじゃないかなと思うのです。それをどういうふうに受け止めていくのかは、個人差があります。それをまず、自分自身が知っていくのは、とても大切な事だろうと思うのです。

今、写真が回っていますが、2枚とも野上弥生子の90歳頃の写真です。大江さんと写っているもの、もう1枚は私と一緒に写っています。当時、私は40歳です。野上弥生子は私の伯母になります。父の姉です。

終戦の日は敗戦の日だと言うと、その人のあり方がわかると言われますが、ここでは常識的に終戦の日とします。私は18歳で九州の実家を離れました。東京の野上弥生子の家が全焼し、彼女の疎開先の山荘と一緒にいました。8月の12日に戦争が終わった事がわかりました。それより前に、もう終わるのではないかな、沖縄がやられてこのままでは立ちいかない、どのような交渉をして、日本を保っていったらいいのか、という話がずいぶん行き交っていました。伯母のまわりでも耳にしていました。私のそれまでの世界と違うものですから、妙な事を話す人達だなという気持ちがありました。九州の田舎で、軍国主義の教育を受けてきましたので、何で戦争が終わるのかな、どうして負けることを正々堂々と言うのだろうか、と内心思いながら一緒に生活をしていました。

8月の12日に戦争が終わった時、ものすごく大きな声で叫んだのです。『伊都子ちゃん、戦が終わったよ。大博打が終わったよ。さあこれから私達の人生だから』と伯母が言ったのがちょうど60歳の時でした。それで私も、60歳までは、てれんこと生きていても、60歳からは自分のことを考えて生きようと決め

ました。老後は60歳からだと思っています。皆さんの場合は如何ですか。皆、それぞれ違いますから、私に老後は無い、最後まで現役だと思う方は、それはそれで面白いと思います。

一口に言って野上弥生子はどういう人だったかということ、背の高さは少し小さく、145センチぐらいで小太りでした。体重が51キロです。今私が着ている着物は後でエピソードとして話しますが、作家の宇野千代さんが伯母にくれたたものです。それを私の母にくれ、母が持っていました。宇野さんは、見上げるような大女で顔も長く、お会いするときはお化粧をいつもきちんとして現れるお方でした。いつもニコニコしていらして、クルクル、クルクルよく動く人でした。伯母はどちらかということ、ゆったりした人でした。何か面倒があっても、『それ済んだ事でしょ。もう済んだことでしょ。めんどくさいからよそう。』と、言うような人でした。ある時私は、大切なお皿を割ってしまい、じっと眺めていました。家が焼けて食器も少ないのに、でっかいお皿をポンと割ってしまって、動揺しながら眺めていたら、『そんな、眺めていたら、いつまでもクヨクヨするんだから、外へ行って捨てて来い。』と言われたことがあります。済んだ事にエネルギーを使うな、というような性格でさっぱりしていました。

それから、百歳まで生きたことの一つには、作家でしたが、生活の仕方が普通の人と同じだったこともあると思います。当時は女の人の職業としては、学校の先生・看護婦・電話の交換手ぐらいでした。お弁当を作り、3人の子供達を学校へ、主人の野上豊一郎を大学に送り出した後、自分の書斎へ行き、原稿を書いていた。今ならさしずめ、スーパーに行きレジをやる、それと同じ感覚です。当時はパートタイムがなかったので、作家という職業を選んだのでしょう。自分の食費は自分で稼ぐという考えは非常に徹底していました。『私は労働者だ』とはっきり言っていましたから。

野上弥生子の年譜

皆さんのお手もとにプリント『野上弥生子の年譜』があると思います。読んでみます。明治18年に大分県の臼杵町（現在は臼杵市）に誕生。家には井戸があり、その井戸の水で産湯を使った。私も同じ井戸を使いました。6歳の時、小学校に入学。10歳で源氏物語を読む。これは寺子屋でのことです。家は商家で大変忙しく、子供がそこに行くと言えば、いってらっしゃいと出していた。別段勉強が好きで行っていたのではないと、自分で言っていました。14歳で英語の学習を始めています。大分県臼杵町は、キリスト教がかなり早く入って来たところで、町に宣教師がいる教会がありました。そこでちょっとハイカラなお菓子を食べたり、腰掛の椅子に座れるからと、そんな理由で英語の学習をしていたようです。本気で英語をやりたいのではなかったようです。

15歳で上京。弥生子はど近眼でした。6歳か7歳ぐらいの時に自分が近眼だと気がついたようです。実家が古い商家なので、結構封建的なところがあります。食事をしている時、大家族のところには一人か二人嫌な人がいます。当

時、肺病病みの男の人が居候をしていて、伯母がこうやって、眇（すがめ）をして食べ物を見ると、『そんな目をしていると嫁に行けねえぞ』と、肘で小突くのだそうです。食事の時にそう言われると、皆、食事がまずくなるので、それが嫌だったと言っていました。そのおじさんがどういう権力を持っていたのか、どういう意味で小手川家に座っていたのかわからないのですが、弥生子の母親が「弥生さん、そんな目をしなさんな。」と、追従したようなことを言って注意する。その後もそれが続いたそうです。

弥生子はど近眼で、顔もお盆みたいに真ん丸く、おまけに鼻はぺちゃんこで、メガネをかけたら、ずいぶん滑稽な顔だったと言っていました。14歳で英語を始めた時に、宣教師が彼女の目のわるいのに気がつく。ある日、お医者さんが弥生子の家に来て、『弥生さんの視力はもう限界です。これ以上放置していると転んだりして危ないので、メガネを作った方が良い。』と言うわけです。そこで、面白いのですが、家族会議を開くのです。まず、嫁入り前の娘にメガネをかけさせるといのは如何なものか、もう嫁に行きませんと言うようなものだ。メガネを作るのは非常にお金もかかり、当時ではメガネはインテリと金持ちの象徴でした。弥生子は『嫌だ。』と言います。私は嫁には行かない、学問をしようと、東京へ出て行こうとするわけです。今は東京へもどこへでも出てこれますが、当時は大変でした。

人の出会いというのは不思議なもので、弥生子のおじにあたる人が東京にいました。私の実家には妙なのがいっぱいいるのですが、そのおじはせむしでした。カルフォルニア大学へ行き、その後は、せむしのことでいじめられた故郷には帰らず、東京へ行き、日銀に入りました。その後、しっかり者のお嫁さんを貰いました。そのおじさん夫婦が東京に来る弥生子を引き受けてくれたのです。これは非常にラッキーな話でした。当時は九州の大分県から東京までは、線路が続いていなかった。まず、東京と大阪間は列車で、大阪から九州までは船に乗ります。その船旅が長いのです。年に2回ぐらい故郷に帰っていたようです。

ある時、船の中で野上豊一郎という人物に出会い、その後結婚をします。野上豊一郎は同じ臼杵の人で、両親は無く、奨学金で一高に入り、当時は東大の1年生ぐらいのときでした。伯母は、学生帽をかぶって船に乗ってくる男の人は、どういうことを大学で勉強しているのだろうと思い、一生懸命いろんなことを聞いたようです。そういうきっかけで野上豊一郎に興味を持ち、二人は段々親しくなっていきました。弥生子は明治女学校で6年間学び、故郷に帰っても、また、どうせ女が学問なんかして、メガネなんかかけて、嫁の貰い手がないよと、朝から晩まで聞かされるのはいやだと思った。当時は、妾を持つのも男の甲斐性というような言葉があって、妾さんを持つのがあたりまえという時代でした。自分がもし嫁いだとしても、お月様をぺちゃんこにしたような顔で、メガネかけているような嫁はつまらないから、妾を持つことが平気で通っていくだろう。それは嫌だから帰らないと言い、そのまま野上豊一郎と同棲生活を始めます。その時、野上豊一郎は東大の3年生でした。良くまあ、食って

いけたと思いましたが、奨学金で食べていたようです。もちろん、間借生活でした。

当時、東大の英文科の先生をしていた夏目漱石のところへ皆で集まって、色々な事を話したり、自分の作品を持ち寄って、合評会のようなものを行っていた。野上は、それから帰って来ると、伯母にこういう事があった、ああ言う事があったと話して聞かせる。伯母もそれについて思ったことを話す。その辺は、新婚の普通の家庭とずいぶん違ったものでした。漱石の木曜会は高尚なところだった、と聞いたことがあります、そうでもなかったようです。『桐の葉の ドブと川に 落ちにけり』という句を誰かが作って、それを漱石が『これは、なかなか、名作だ』と言い、皆で笑っていたそうです。

伯母は実家で商家の女将さんが忙しく働いているのを見て、手伝いもするし、経済的にもしっかりと育てられているので、自分で自分の食べるものは稼いでいきたいと、翻訳を始めます。そのかわら、自分が書いた物を漱石に見てもらおうと思い、豊一郎を通し、木曜会を通して、夏目漱石のところに出します。最初の頃、漱石は、『野上さんは、美文、美しい文章を書こうとしている。物があるがままに、しっかり目をあけて見なさい、あるがままに書きなさい。』と写生文を書く事を勧めるた。私は『だって、ド近眼なのにあるがままって、見えるの?』と言いました。『そりゃあ、お前、目はここについているけどもね、前にも後ろにも、頭の中にもついているのだよ。』と言われました。しっかり見た物をそのまま素直に書き、それから何回か漱石に見て貰いながら、最初に書いたのが、ホトトギスに出した『縁』という作品でした。それは、おそらくお金になったのだらうと思います。それで、いくらか原稿料が入って、自分はこういうことで経済的に独立していこうと思ったようです。

ここで男の子が3人、たて続けに生まれています。(長男素一を25歳、次男茂吉郎を28歳、三男耀三を33歳で出産) 当時は家事をしながら、子供を育て、その間にもものを書いていたようです。

その頃、平塚らいてうが26歳で『青鞥社』を作ります。先日「岩波ホール」で平塚らいてうの映画がありました。ごらんになった方がいらっしゃるかと思います。その頃、伊藤野枝さんに出会います。その中で言っている伊藤野枝さんとの出会いは、私が他から聞いたものとはかなり違います。伊藤野枝さんは青鞥社の女性記者でした。たまたま、彼女の家と近いからということで、原稿を渡していました。どのような様子で会っていたのかと聞いたら、どちらも子育てで忙しい時期だったから、着物にタスキがけの格好で会っていたようです。そういう格好で原稿を渡し、向こうも赤ちゃんを抱っこしたまま受け取る状態でした。伊藤さんとは一人の思想家アナーキストではなく、一主婦として仲良くつきあっていました。野上弥生子は青鞥社には編集ではなく、原稿を寄稿してました。

ソーニヤ・コヴレスカヤの翻訳がありますが、伯母は翻訳の中では一番お気に入りでした。ロシア革命の後の頃に出て来た人で、美しい性格が良いと言っていました。もうひとつ面白いのは、コヴァレスカヤもメガネをかけていて、

それが嫌で人が来たら、ぱっと隠すと知り、私と似ているから好きだと言っています。

この頃から、だんだん思うことが書けなくなっていくます。日本が右翼化していき、思うことが書けない。原稿を出すと、墨打って返ってくる事が多くなる。この時期、彼女は自分の身の周り、子育て、子供の育成、教育、養育にまつわる、悲喜こもごもなことを写生文として書いた。私達が自分の周りのことを書くような形で書いています。それに対して、漱石なり豊一郎なりが、チェックし、合評（公平な批評をする）をしていたようです。31歳の時に出した『新しき命』はなかなか良い物です。これは、漱石が亡くなり、三男が生まれ、野上豊一郎が法政大学の教授となった時期です。夫に定収入があるということが彼女を安定させていて、それに感謝していました。

46歳の時に、満州事変があり、50歳、台湾旅行をする。52歳頃から、婦人公論の巻頭言を担当します。しかし、途中でこの仕事を降りました。原因は、婦人公論が本来持っていたスタイルをはずれて、週刊誌的なアクロバチックになったことで降りた。自分がやりたいことの範囲からはずれ、そこにお呼びが無いとなったら、さっと降りる。

53歳の時、ヨーロッパに行きます。これは、夫、野上豊一郎が謡いの宝生流をやっているとして、英語で日本の能を紹介して欲しいと、1年間イギリスの大学に招待されるわけです。それについて行こうか、どうしようかとずいぶん迷う。まずお金が無い。決して、実家にお金を出して欲しいと言わない人です。その時、岩波さんが山荘まで訪ねてきて、『帰ったら旅行記を書いて下さい。それのお金を前貸しするからいってらっしゃい。』と勧めます。

当時は、ヨーロッパに行くにも全部船でした。その時、初めて洋服を何枚か作りしました。途中で、第2次世界大戦の勃発に巻きこまれます。アメリカ大陸を2週間かかって横断するのです。『あの物量にぶったまげちゃって、あのような大きな国と戦争するなんていうのは、頭が狂っているとしか考えられない。』と言っていました。その時の旅行記を、朝日新聞の新聞記者の方が覚えていらして、ちょうどこの間、アメリカでセプテンバー・テロがありました。アメリカの摩天楼がひっくり返りました。伯母がアメリカから帰って来て書いた旅行記の中に、『飛行機が落ちる時はどうゆうふうになるのだろう。色々想像する。あの飛行機が摩天楼に落ちたらどうなるのだろう。』と、書いてあった。作家はすごいと感心してくれました。

59歳の時、北軽井沢の山荘に疎開します。終戦の年の昭和20年に、もう直ぐ戦争が終わるといふ時に家が全部焼けてしまいます。8月の12日、NHKが取材に来ます。いわゆる、知識人にこの戦争に負けるとこれからどうしたら良いか、聞きに来たのです。その時、伯母はたいした人なのだと思います。高野岩三郎さん（戦後第1回のNHKの会長）や高浜虚子など他に何人かいました。一番初めに聞かれたのは、『天皇陛下をどういうふうにしたら良いでしょうか。』ということでした。すると高野岩三郎さんが、『政治に口を出さずに、好きな植物などを勉強してもらったらどうか、そういうことで延命が図れ

ないかね。』と言われました。伯母は『とにかく、学校を作りなさい。若者が戦争や軍需工業に行って帰ってきて、行く場所が無い。何でも良いから、学校を作って、皆入れちゃえ。学校で4年間学んでいるうちに、少しは世の中が収まるでしょう。そうでないと、暴動が起きる。』と言いました。当時はアメリカさんと言っていましたが、『アメリカは直ぐ学校を作ったり、そういうことはやってくれる。とにかく、早く作って若者を入れなさい。そうしないと若者のエネルギーの持っていき場所が無い。』

62歳の頃、野上豊一郎が法政大学の総長となります。家が焼けていたもので、法政大学の総長室に寝泊りしていました。法政大学は戦争中、経済学、マルクシズムをとって国立大学を追われていた人など、それを一手に引き受けた、非常にアカデミックな良い学校でした。その総長になり、色々な事で忙しくなったので、東京に家を持ちました。でもやはり、お金が無くて借地です。今の、大衆作家という人達は非常にお金持ちだと思っけていますけど、普通の純文学の人は貧しくて、憤まじやかです。芥川さんがノイローゼになって自殺していくプロセスの中でも、やはり食べていけないというのが原因でした。だいたい作家というのは、ノイローゼになるか、自殺するか、アル中（アルコール中毒）になるか、そういうのが作家の最後です。そういうものだと思っけてくださって良いです。

72歳の時に一人で中国旅行をします。中国の普通の家に泊まり、皆と一緒に生活をしながら過ごしたようです。皆さんがもし中国に行くと、五つ星マークなどではなく、普通の家に泊まって、3週間なり4週間なり一緒に生活するということが出来る時代です。非常に良い経験になると思います。それから75歳で『秀吉と利休』を書き始めています。弥生子はひとつの作品にとりかかると完成までが長く、10年から20年ほどかけています。この頃、野上豊一郎が亡くなり、政治運動に表立って出て行きます。60年安保の時に、弥生子が尊敬していた市川房江、佐田稲子さんなどと一緒にあって、『安保反対』の運動をしていました。大学教授をしている夫がいるので、迷惑がかかってはいけないと、政治運動はいっさいしなかったのですが、野上豊一郎が亡くなってからは、俄然、活動を始めます。その後、市川さんが亡くなられた時に弔辞を書いています。

伯母は、ど近眼でしたので眼鏡をかけずにお茶を入れる時は、湯飲茶碗の中に入らないで、横に出してしまうのです。私があわてて、『伯母様、外、外。』と注意すると、『お茶碗が動いたんだよ。』と冗談を言っていました。それぐらいど近眼でした。家に伺った時は、私が玄関先で『こんにちは伊都子です。』と言わないと、『あの、どなた様でいらっしゃいますか。』と言うほど見えなかったのです。『お前が見た物の形と、私が見ているものの形は違うけれど、それなりに見えているよ。』、『もし、私がクリスチャンだったら、視力の一部分を神様に返した後は5体満足だから、お返しするまで十分に使わせてもらおう、と言うだろうね。』と、身体も含めて大切にしていました。

市川さんが亡くなった時に、目のせいで弔辞を読めなくて、代わりに村岡花

子さんに読んで頂いたことが気になっていたらしく、白内障の手術をすると言い出しました。96歳の時です。今みたいに簡単な手術ができる時代ではなかったもので、皆が必死になって止めました。以前、東大病院で歯を抜く時に、『全部抜いて入れ替えた方が良いです。』と言われ、『あ、そう。』と承知したものの、歯医者さんがちょっと場を離れて向こうに行っている間に帰ってきてしまったのです。『1本でも2本でも残っているから、今のままで良い。』と書いていました。野上弥生子は、そのあたりでは有名な人なので、いなくなったものですから東大中、大騒ぎになったようです。

97歳の時に白内障の手術をします。眼鏡を調整したら良いのではないかとアドバイスしたら、『書物を読めないで何の人生か、私は手術をする。』と言ってきかず、結局手術をしました。執筆中の『森』という本を完成させたいという理由もありました。三度のご飯も、最後まで自分で作っていました。お風呂も沸かしていました。洗濯もそうです。お腰巻という下着も、洗ってほしいと頼まれたことはありません。しかし、そこは昔かたぎの人で、日当たりの良い場所に干した方が良く乾くのに、日陰に干していました。外出するときに『草履どれにする。』と尋ねると、『私が自分で決めるから良い。』と断る。『今日はお天気がいいので傘いらないから、ステッキにしよう。』行って持つてこようとすると『自分で持つて来るからいらん事するな。』と全部自分でします。伯母の家には掃除機も洗濯機もありません。

私達が今の時代、共に生活している時、何でもしてあげるのは、相手に対して非常に失礼だなという気がします。北軽の家にはトースターが無く、夕方になると、寒くなって薪ストーブを燃やす。その上でパンを焼き、これで間に合うから良い、物を大切にすることというのは、それを作った人がその向こうにいるわけですから、人を大切にすることだということを経験させてもらいました。

伯母の家の周囲は木が多く、日当たりが悪いので、糊をつけた枕カバーを私の家に持って帰り、乾かしてあげることが私の役割でした。しかしその枕カバーは3重にも4重にも継ぎがしてあり、なかなか乾かないのです。ある時、『面倒だから新しく作り変えようよ。』と言うと、ものすごい目でジッと睨んで、『お前、これまだ使えるよ。』とひとこと言うのです。仕方なく、私は家へ持って帰ったのですが、枕カバーは、透かしてみても向こうが見えないほど何重にも継ぎがされていました。私はそれを形見分けに貰おうとしましたが、どこかにいってしまったようです。

伯母は亡くなる寸前まで、原稿を書いていた。絵描きは自分の伝えたいことを絵に描いて伝え、詩人は自分が伝えたいものを詩の形にして表します。作家はそれを文学という形で伝える。だから伯母は最後まで書いていたのだと思います。

最後の作品の『森』を書き始めて、もう、十何年掛かっていますけれども、伝えなかったのは、常に根底に『女性』がありました。芥川さんの自殺の時の様子が影響していると思います。今までの家族制度が壊れていくなかでの、年老いた男女の生き様に焦点を当てて書かれていました。『森』が未完成に終

り、とても残念です。

10分間の休憩が入る

人とのふれあい

私達は色々な人が色々なパーソナリティを持っていて、人それぞれ違います。今から少しカウンセリングでやるようなことを、1分間ほどやってみたいと思います。

皆さん、その場で、まわりをぐるっと見渡してみてください。今日、初めて会う人がいると思います。そこでお立ちになって、初めて顔を合わせた人に『こんにちは。』と挨拶して、元の席にお座り下さい。ではどうぞ、始めてください。

これが人と出会うということです。知らない人が自分の近くに長く座っているのは、あまり気持ちの良いものではありません。だから、つい誰か知っている人と一緒に行こうとなります。知らない方でも一言でも挨拶を交わすと、お互いに安心感が生まれます。挨拶は、私は貴方の敵ではありませんと言うメッセージ。実行なされるとよいかと思います。

後半のエピソード(資料) 1 . 2 . 3 . 4 . 5 . 6 と項目がある

1 . 文化勲章の話

文化勲章は、概ね年に5人です。伯母は、『勲章は、子供と軍人が欲しがるものだ』と言っていました。いきなり伯母の所に来たのではなく、次々と回って来ました。断る人が沢山いるのです。大江さんも断られたそうです。伯母はせっかくだからと貰いました。82歳位の時です。伯母は私に『ねえ、文化勲章もらおうかと思うのだけれど、お前どう思う。』と聞きました。弥生子はそういう事を言いながら、安心して話せる人を前にして、自分の考えをまとめていったようです。年金もない時代でしたので、野上豊一郎が亡くなった後は、定収入が無かったようです。文化勲章は定収入を毎年頂けるようで、『もう直ぐ、お弔いが出るような人にしかくれないんだろう。』と言っていました。20年も出し続けたので、国も損をしたと思います。

その後、『一隅の記』と言う本を出しましたが、表紙の絵を絵描きさんに描いて頂きました。そのお方は文化勲章を断っているのです。弥生子は文化勲章を貰っていることをひけ目に感じ、その絵描きさんに頼むことをためらっていました。そのことを新潮社の人に漏らしていました。するとその人が絵描きさんに伝えられたようです。ある日、電話がかかってきて、『描きましょう』と申し出され、描いてもらったいきさつがありました。

2 . 宇野千代さんに頂いた「ちゃんちゃんこ」の話

誰かに染めてもらって、ご本人が縫われたもののようです。これを90歳の伯母にくれた時、私はものすごく派手だと思いました。これを頂きたいきさつも、大変面白いです。当時、女流文学新人賞の選考委員会が毎年9月の第一日曜日に行われており、私はお供をしていました。伯母が90歳の頃でした。萩原

葉子さんの『蓐麻（いらくさ）の家』が入りました。

女流新人賞はどのようにして選考会があるかということ、その年に生まれた本を、婦人公論社（中央公論社）で、記者が粗（あら）読みをします。そこで10冊か15冊に絞るのです。それを、選考委員のところへ持ってくるのです。私が知っている範囲では、井上靖さん、芝木好子さん、佐田稲子さん、野上弥生子と、あともう一人いました。選考委員は婦人公論社の方々が粗読みしたものを全部読みます。6月、7月、8月はそれを読むことでつぶれます。私も時々読まされ叔母の横にすわって音読します。

その年の受賞作は萩原葉子さんの『蓐麻（イラクサ）の家』でしたが、伯母は他の本は全部読んでいましたが、たまたま、『蓐麻の家』を、一番後回しにして、読んでいませんでした。

9月の第1日曜日、軽井沢の「ゆうぎり」という料亭で選考が行われ、最終候補として、萩原さんの『蓐麻の家』が出ました。『私は読んでいないので、票を入れることが出来ない。辞退します。』と言って帰ってきました。その後『もう歳だし、選考委員を降りようか。』ということになり、その事を婦人公論社の嶋中社長に告げました。『それでは誰か他の人を代わりに立ててくれ。』と言われ、宇野千代さんを推薦しました。宇野さんは以前、婦人公論の女流文学新人賞の選考委員でしたが、有吉さんの時、新人賞が二人出て、『二人というのは、私は解せない。』と席を立ち、喧嘩別れになりました。

『今、大きな物を最後の作品として書いている。それに専念したい。婦人公論の女流新人賞の選者を降りるから、貴女にバトンタッチしたい。』と宇野さんに申し出ました。宇野さんが、『引き受けましょう。』と承知されました。それから私もお供で選考会が行われている軽井沢まで行き、廊下で座って待っていました。すると宇野さんが来て、『私ね、ちゃんちゃんこ作ったのだけれども、野上先生に差し上げたいのです。』と言われました。ちゃんちゃんこは袖が無いから便利だし、伯母もわりに好きで着ているのを見ていたので、『気に入ると思いますよ。』と言ったら、直接みせてくれました。それは90歳の人にはちょっと派手なものでした。それに濃紫の風呂敷を付けて私に渡されるのです。私は『ご自分から渡された方が良いと思いますよ。』と言ったら、『私ねえ、野上さんが怖いよ。』と言われるのです。ある時、『宇野さん、あなた、人を愛してる、愛してるって、言うけれど、本当に愛しているのは自分自身でしょ。』と、ぱっと、言われたのだそうです。『その事があって、怖いよ。』と。瀬戸内寂聴さんも、『野上先生、どちらかということ一番怖い。』と言います。どうしてなのかな、叔母は非常にすっきりした人なのです。

選考会が済んだ後、食事をしました。叔母にはこれが最後の選考会だからと、タクシーを用意していただき、それに乗ろうとしたら、宇野さんがまだちゃんちゃんこを渡せないでいて、玄関に来てちらっと私を見ます。『宇野さんが、何か差し上げたいと、持ってらっしゃるわよ。』と言ったら、『どれ。』と言い、伯母がそのちゃんちゃんこを着てみたのです。伯母は『あら、よく似合うわ。どうも、ありがとう。』と礼を言い、草履を履いてタクシーに

のりしました。選考委員を降りる寂しさと、緊張感もあったと思うのですが、車に乗った後は重苦しい空気でした。『宇野さんて、綺麗な人ね。』と言うと、『小学校の廊下みたいに顔を見がいてる。』と言うのです。みなさんが私達を見送ってくださったときに、隣に佐田稲子さんがいたのですが、『佐田稲子さんのほうがよっぽど良い顔している。』と、今まで着ていたちゃんちゃんこをぽーんと、脱いで、『これ、みっちゃんにあげて。』と言うのです、私の母です。伯母から言えば、小姑にあたります。それで、私が『あ、そう。』って、貰い、私の母にあげました。このちゃんちゃんこは、もう暫くしたら国に送り返しますから、どうぞ見てください。伯母は全然、興味が無かったのですが、頂いた時はちゃんとそれを着てみせたのです。実に辛辣だなあと思いました。伯母としては、宇野さんより、一緒にデモに行った佐田稲子さん達を友達だと思っていました。

3．加藤周一さん（医者）の話

日本とヨーロッパやアメリカのどこかと、中国と3カ国の大学で講義をしている先生です。ある日、クラスにいた時、たまたま私がいて、伯母が『貴方はお医者さんなので、聞きたい事があります。』と言いました。物理学者が来れば、物理学者に『原子とはどういう物か。』など専門的なことを聞いていました。

『私は、朝、抹茶を2杯飲むと血圧が上がって、直ぐに元気になるのです。これはお医者さんの立場から如何ですか。』と聞いたのです。『何で血圧が上がるとお分かりになるのですか。』、『胸に手を当ててみると、胸がときめいて調子が良いので、一気に書き上げるのです。』一気と言っても、原稿用紙（200字詰め）2枚です。目が見えないので、ペンを間違えて糊の中に入れてしまったことがありました。すると濡れたタオルで拭いて乾かします。丸めて捨てるということをして絶対しないのです。間違ったものは糸きりバサミで切って裏に糊をして、息を吹きかけ乾かすのです。丸めて捨てるということが出来ない明治の人です。加藤さんは大変困って、『ご自分が良いとお思いになれば、それが、一番良いでしょう』と言われました。

4．大江健三郎さんとの対談

朝日新聞が1年に1回、お正月に色々な有名人との対談を企画します、ある年、伯母は大江さんとの対談しました、大江さんとは50歳位年齢が違いました。対談では戦争の話になり、『貴方は、障碍のあるお子さんを持っていらっしゃるけど、もうちょっと人の親切を素直に受け入れなさい。私は、もう、北軽井沢で多分、死ぬと思います。その時はお弔いをお願いします。』と言っていました。後になって考えると、その時何か思うものがあったのかなと思います。対談後いただいた写真は、自分が持っていてもしょうがないから、大江さんに上げると言っていました。

5．芥川龍之介さんに死を勧めた話

芥川さんは近くの日暮里に住んでいらして、しょっちゅう遊びにきていたようです。普通は表から来るのに、その日は、はたきみたいな髪をして裏木戸から来ました。当時、神経衰弱がひどかったのか、ぼかんと台所に座って、愚痴を言い始めました。たまたま野上豊一郎も家にいたようです。芥川さんの家に同居している女性の方が浪費家で、自分はそのために一生懸命働いて原稿を書いているけど、どんどん色々な物を買って、もう自分は疲れ果てたと言うのです。伯母が『こういう仕事は、野垂れ死するか、アル中になるか自殺するか、そういう生き方を覚悟しておかないと続けられないのだ。』と言い、死を勧めたのです。

その1ヶ月後に芥川さんは亡くなりました。その話を中央公論みたいなものに出しました。電話インタビューでした。伯母が話した事を雑誌記者が書き取って、それをもういっぺん活字にして送ってくれ、チェックするのですが、この時は最後のチェックを、電話の向こうで読んでもらって、『それで良いです』と言いました。本に出たのは、『死』ではなくポエム『詩』になっていました。伯母は死を勧めたのに、詩になっていて、まるっきり意味が違っていたのです。『やっぱり、ずぼらをするものじゃないね。』と言って、向こうを責めませんでした。まさかねえ、詩じゃないですね。原稿をチェックしないで、電話で音だけでやってみて、それで良いと、活字になってみてから気づいたのです。

6．野上弥生子と宮本百合子の話

二人はいつも比べられていました。宮本さんは関西の建築家の、大変な大金持ちの家のお嬢さんでした。離婚して帰って来た時、親御さんは離婚をしてかわいそうだからと、女中さんと番頭さんをつけて世界1周をさせたそうです。それぐらい大金持ちの家でした。百合子さんの性格は火の玉みたいな魂の人でした。その後、宮本顕治さんと再婚されました。主張を貫いて投獄されて、栄養失調になって、めくらになり、戦争が終わると帰ってこられました。亡くなる1ヵ月位前に伯母は、彼女にあっています。当時はよく、『野上さんは戦争中に戦争反対をしないで、戦争が済んだら、さあ、私は平和主義者みたいな顔して、デモに出かけて、けしからん。』と言われました。

野上弥生子評を書いた渡辺澄子さんに私も会いました。3人の男の子がいたものですから、何かやると戦争に引っ張って行かれて殺されてしまう。そこで海軍関係の理化学研究所という所に息子を就職させ、いわゆる、兵隊逃れをやったのです。そのことを猛烈に言われました。伯母は、何の弁解もしませんでした。その後、私にぽろっと、涙を落として、『私はただの母親よ、ライオンだって、猫だって、犬だって子供を守るでしょう。私はただのメスの母親。』と言っていました。男の子3人、子供を守ると慎重にならざるを得ない。評論家の人達から見ると言い逃れで、けしからんと言う事になります。中村智子さんとは2、3年前に会ったのですが、大変優しい人でした。野上弥生

子が亡くなった後に、『野上弥生子論』を出した人です。伯母が生きていたら、ずいぶん喜んだらうなあと思いました。

伯母の生き様は、出来ない事はしない、でしゃばらない、分をわきまえる。そのうえ、非常に前向きです。極楽トンボって言うのでしょうか。マイナス・ストレスを作らず、プラス思考で、一つ、一つをかたづけしていく。それに非常に面倒見の良い人でした。それで芥川さんもこられたのでしょうか。伯母も知らなかった、私も知らなかったし、皆さんも、ご存知無いと思いますけれども、芥川さんは、ひどい近眼だったなんて！豊一郎の友達に眼科医がいて、たまたま、高等学校が芥川さんと同じで、芥川が死んだ1ヵ月位後に、『芥川が死んだね。』と、野上豊一郎が言うと、『ああ、自殺したね。』と言ったそうです。『どうして芥川を知っているんだ。』、『いや、うちの患者だったんだ。』と言うわけです。『芥川はひどい近眼で、メガネかけるのが嫌いで、なんか、近眼と神経衰弱は関係あるのじゃないかなと思って、今日はその話をしに来た。』と言うのです。伯母は芥川さんが近眼だったのを、あれだけ身近にいて知らなかった。芥川さんは物を書く一人の時だけメガネをかけていて、あとはかけなかった。

私達は流行でメガネをかけていますけれども。メガネは人の命を奪ったり、嫁入り前の女がメガネをかけると言ったら、嫁に行く事が出来ないと、これは、ある意味の恐怖じゃないかなと思いました。芥川さんは、メガネをかけていると、小学生がおじぎをする。自分が偉くなって威張っているようで嫌だったようです。メガネをかけていることが、女性にとっては悪いが、男の人にとっては箔がつく。「女だてらにメガネをかける。」という言葉などがあって、さんざん嫌な思いをしてきたけれど、今はそれが無くなってきました。

これからの生き方

年金があって、自由に使えるお金がある。コミュニティの仕組み全体があって、出身地や家系、年齢など色々なことが全然問題にならない。目の前にいる、その人の全人格で関わり合っていけます。それでいてなおかつ、やがて出てくるであろう、「死」というものに対して、非常に構造的に暗いイメージだけしかない。それをひしひしと感じたのは、村上春樹の『アンダーグラウンド』を読んだときです。アンダーグラウンドというのは、『地面の下』ということです。サリン事件と関西の地震は、前後して起き7年経ちましたが、村上春樹は、その当時の被害者に面接して書いている、非常に名文で読みやすい良い本です。是非お読みになって下さい。読んでみて気づいたことは、政府は何もしてくれないということです。私達がここで、東京で地震があったとしますね、政府は何にもしてくれない。アンダーグラウンド、すなわち、地下鉄の被害者、地震の被害者にいつでもなってしまう。いつ、そういう地震の被害者になるかわかりません。

今の福祉も、このままでは困ります。次の世代には構造的にも変わっていく

かもしれません。アンダーグラウンドと同じで、誰かにやってもらう、政府にやってもらうというのは、無理なのではないでしょうか。とりあえず自分でできることは自分でやるべきだと思います。

ある新聞に、岡山病院のお医者さんが書かれた『それでも救急車呼びますか』という本が載っていました。それは、カナダで10年前位に出来た法律のようなものです。自分がこんな状態になった時、治療はここまでして、これから先はしないで下さいという、治療の選択の項目がいくつか書いてあります。医学関係の本ですが、治療にあたって、個人の意思が無いと医者も困るのです。家族から『こういうふうにして下さい。』と言われても困るのです。本人がどういふことを望んでいるか、わからない。他の家族に言うておくからいいというのでは、万が一が家族に何かあった場合に困ります。ちゃんと書類に残しておく。書類に残す作り方、みたいなものもこの本に書いてあります。

これは関西でドンドン広がっています。私も会員になりました。色々なシンポジウムなど送ってもらっています。これを読むと、こういうことが出来る、ああいうことが出来るとわかります。本当に自分がこういうふう、自分のエンディングを迎えようと決めると、どのように生きていくかということが見えてくるのです。

いつも、どうすべきか、何をすべきかなどと考えるのではなく、誰にも遠慮せず、もっと楽しいことなさったら良いと思います。楽しいことをやると、自分の中で別の性格の一面がドンドン出てきます。人間はもともと、生き生きしているものなのです。『アンダーグラウンド』、『それでも救急車呼びますか』も面白いです。これを読んでから、私は、先送りしていたことが具体的にしっかりしてきました。ご自分で、『貴方は何が出来ますか。何をしたいですか。』と言うといいです。『三度のご飯を自分で作ります。』、『自分のことは自分でします。』とか、そういう出来ることを沢山書いてごらんになると良いです。

自分が活性化することで、自分が持っていない、もうひとつの自分を発見できたら良いと思います。それは、一人では見つけ出すことが出来ないものです。私、こういうところがあったのだと発見する。背が高い、背が低い、痩せているということと同じです。発見したら、それを使わなければならない時に使うのです。攻撃的な人だとか、2枚舌を使うのが好き、それで良いと思うのです。攻撃しなければならない時に使う、攻撃することは悪い事ではなく、その状況判断次第で、2枚舌を使う必要のある時には使ったほうがいいのです。自分の性格を変えるのではなく、今あるものは、そのままいい。私達の性格は今まで生きてきた中で得た大切な物です。その性格があったから生きているのです。そしてそれを沢山の人の人に出会うことで、もう一つ広げていくのです。そういうことは、アカデミックじゃなくて、アホデミックで良いのではないかなと思います。

『それでも、救急車呼びますか』については、今日をスタートとしてもう少し勉強会をやります。10月頃、岡山でのシンポジウムに出る予定です。一緒に

行きたいと思っている人はどうぞ。あとでそれについての感想を聞かれてもいいです。とにかく、できることは人任せにしないで、やってみましょう。長寿イコール幸福というものが無いのです。未来が燦然と輝いているとしたら、私達は、もう少し生き生きと生きていけるはずですよ。

しかしどうしてこんなに自殺が多いのでしょうか。若い人達は長寿イコール幸福だと思えず、ドンドン自殺していきます。女性は虐げられていたから強い。女性達が長寿イコール幸福ということを作っていく。自分もその一員になれます。一人では出来ないことを皆で、一緒にやると同質の意識が出てくるのではないのでしょうか。今日はこの時間はおしまいです、後はスタートの時です。宜しくお願いします。ありがとうございました。

司会者、終りの挨拶

ありがとうございました。今日はさらさらのエピソードを交えながらお話をいただきました。生き方、生き様など、お話の中から質の高い老後生きるヒントがいただけたのではないかと思います。松尾伊都子さんのお便りで、心に残ったことを、もう一度申し上げます。「地域は、新しいファミリーの形を作っていくのではないかと。」全くその通りだと思います。血縁関係のファミリーに変わって、私達がこの区民センターで出来る事があつたら本望です。皆さん、これからも宜しくお願いします。

『質の高い老後を考える』